様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年４月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５２０１７８
研究課題名（和文）　「部屋」のトポス―ローベルト・ムージルと崩壊期のハプスブルク帝国の文化

研究課題名（英文）　“Room” as Topos: Robert Musil and the Culture of the Habsburg Monarchy since the Fin de siècle.

研究代表者
赤司　英一郎　(AKASHI EIICHIRO)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：８０２２２５１１

研究成果の概要：
十九世紀末から二十世紀初めにかけてのハプスブルク帝国における「部屋」のトポスについて研究することで、この多民族国家において他者からの分離と孤立の度を深めていった人々および個人にとっての心理的避難所として機能した「部屋」のはたらきを明確にするとともに、そのような内部としての「部屋」と外部にいる他者との関係をあらたに見直し、その当時に表された作品と作者と社会とをむすぶ糸について新しい見解を提示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	４００，０００	０	４００，０００
２００７年度	３００，０００	９０，０００	３９０，０００
２００８年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１，２００，０００	２４０，０００	１，４４０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：独文学

１．研究開始当初の背景
それまで私は、二十世紀ドイツ語圏で最高の作家の一人と評されるローベルト・ムージルの研究を、もっぱら作品論のかたちで、内在的研究を通して行なってきた。すなわちムージルは、大まかに言って長編小説２つ、短編小説６つ、戯曲２つを遺したが、そのそれぞれについて作品論を書いた。しかし、彼の創作活動の全体像を剔出するためには、彼の生きた時代の社会状況や当時の人々の物の見方や思想について、もっと詳しく調べ、外在的研究の成果と内在的研究の成果とを照らし合わせる必要を感じるようになった。そして社会状況と創作者との関係について、さらに一般的に考察したいと思った。具体的には、
（１）多民族国家であったハプスブルク帝国が崩壊して幾つもの民族国家が生れた時代について、とりわけ当時の人々の置かれた精神状況と彼らの抱いた様ざまな思想について、幅広く調査研究すること、そのために、小説家にとどまらず、画家や音楽家などの創

作家たちの活動内容についても詳しく検討すること、それによってムージルをはじめとする作家たちの創作活動の背景を明白にすること、
（２）その一方で、ムージルをはじめとする作家たちの思考に一定の枠組と方向性を与えていたと思われる〈部屋〉の表象に関して、当時書かれた小説等の作品について、さらには実際に〈部屋〉をつくる建築家たちや他の思想家たちの思想についても、幅広く調べて検討すること、
（３）それらの研究結果から、ムージルの思考の独自性や、ムージルが作家活動に託したものについての考察を深めること、それらの必要性をつよく感じたのである。

２．研究の目的
（１）時代状況は、その時代に創られた作品につねに織り込まれ、その作品が成立する根拠ともふかく関与している。たとえある作品がきわめて個人的な動機に基づいて創作されたと主張されうるとしても、その個人的な動機は、時代状況によってつくり出されたと考えられるのである。それゆえ、時代の精神状況を明確にすることによって、その時代の社会と作家と作品とを結ぶ糸が、より判然としてくるにちがいない。その糸は、個々の作品のなかに個別的に見出されるだけでなく、同時代の多くの作品に共通して見出されるものであり、その意味からしても、この研究はきわめて有意義であると考えた。
（２）ローベルト・ムージルはとりわけ初期の作品において〈部屋〉の表象を何度も取り上げているが、〈部屋〉の表象に関心をいだいた作家は他にもたくさんいて、たとえばムージル同時代人の作家フランツ・カフカは、有名な『変身』において、いわば〈部屋男〉の話を書いていると考えられる。そのカフカは、ノートに、誰もが自分のなかに一つの部屋を持っている、と比喩的に記している。この時代の作家たちが、なぜ〈部屋〉に注目し、場合によってはそれにひどく執着したのかを調べることで、時代の流れ、精神史のなかの創作活動、もしくは創作活動のつくる精神史について考察できるのではないかと考えた。
（３）最終的には、没後５０年をとうに過ぎているにもかかわらず、いまだにその全貌が見えてこない大作家ムージルの創作活動の意義について、できるかぎり明確な観念を得ることに貢献したいと考えた。

３．研究の方法
（１）多民族国家であったハプスブルク帝国についての基礎的文献を集め、とくにその多言語多文化的特色に着目しながら文献を整理する一方で、ムージルのみならず、ムージルの同時代人の作家たちがどのような社会状況に直面していたかを調べることにした。すなわち一方では、医者にして作家であり、冷静に時代を観察していたアルトゥール・シュニッツラーにとりわけ注目し、この時代の証人が人間関係のありかたをどのように捉えて表現しているかを調べ、他方では、当時の文化的運動として世間の注目を浴びるだけでなく、政治家たちからも支持されていたウィーン分離派の活動に目を向け、その分離派の総裁でもあった画家クリムトの思想と、彼の一番弟子であった画家シーレの思想について考察することにした。その際のキーワードとしたのは〈他者〉である。なぜなら、この根本的に多文化社会であった多民族国家においては、まさに〈他者〉の感覚こそが、尖鋭化されて共有されていたと考えられるからである。
（２）〈部屋〉の表象については、欧米文化圏において初めてその個人主義的で心理的な特質に注目したエドガー・アラン・ポーや、その精神的価値について徹底的に思考を展開したドストエフスキーをはじめとし、イプセンの『人形の家』、ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』など、幅広く文献を渉猟し、〈部屋〉の表象の歴史的意義について考えを深めることにした。その際、文化論や社会史学の文献、たとえばイーフー・トゥアンの『個人空間の誕生』やピーター・ゲイ『シュニッツラーの世紀』などが大変有益であると考えた。また、実際の建築において、従来のようにファサードを意識して建てるのではなく、建築内部から、すなわち部屋から建築を創ることを構想し実践したアドルフ・ロースの建築思想についても、詳しく検討することにした。
（３）ローベルト・ムージル研究としては、彼のさまざまな作品を〈部屋〉の表象の使われ方という観点から読み直すことした。この観点からのムージル研究は、管見するところまだなされていないので、二次文献の渉猟はさほど重視しないことにした。

４．研究成果
（１）ハプスブルク帝国崩壊期の人々の精神状況を、〈リングシュトラーセの時代〉〈分離派の時代〉〈ポスト分離派の時代〉というふ

うに三つに区分して、それぞれの特徴を整理し、アルトゥール・シュニッツラーの三つの作品『アナトール』、『輪舞』、『夢小説』が、それらの時代のそれぞれの特徴を深く刻んでいることを明らかにした。(論文「崩壊期のハプスブルク帝国の首都ウィーンにおける関係性の変遷について―シュニッツラーの三つの作品に照らして―」)。

また、グスタフ・クリムトとエゴン・シーレの絵画に現れた彼らの思想を読み解き、その両者の違いを、普遍的でイデア的な価値にあらゆる像をゆだねるあり方と、個別的な存在の相互関係性に価値を見出そうとするあり方との違いとして捉えた。そして、それはたんにこの二人の画家の感性と世界観の違いにとどまらず、二人が活動した時代の精神のあり方の違いであるのではないかと考えた。すなわちそれは、前論文における〈分離派の時代〉と〈ポスト分離派の時代〉の違いに相当する。(「グスタフ・クリムトとエゴン・シーレのあいだ―ハプスブルク帝国の崩壊期における〈他者〉」『多言語・多文化社会へのまなざし―新しい共生への視点と教育』所収)。

（２）〈部屋〉の表象については、国内外の建築物のなかの〈部屋〉を調べることによって、伝統的な日本文化における〈部屋〉と西欧文化における〈部屋〉との違いを、かなり明確化することができた。具体的には、その問題について、平成１８年１２月７日ドイツ、エアランゲン・ニュルンベルク大学日本学科において、同大学教育学部リーバウ教授、同大学日本学科アッカーマン教授、東京学芸大学山名准教授と４名でおこなったワークショップ「Lernen (学習)」において、「Der Sinn für „Ma “ (間の感覚)」と題して口頭発表を行ない、日本の伝統的な「間」が西欧の「部屋」とは異なる空間および空間表象であり、そこには日本独特の人間関係のあり方が現れていること、明治以降に西欧の近代的精神に基いた「部屋」を生活空間のなかにどんどん取り入れていくことで、「間」のような伝統的な空間感覚と、それに支えられた人間関係のあり方が失われていったことを示した。(『ドイツ文化学習論による先進的教師教育研究―グローバル社会における文化伝達と指導的人材育成に関する日独共同プロジェクト』平成１８年度大学教育の国際化推進プログラム研究報告書２００７年３月３１日７～８頁、３３頁参照)

また、ヨーロッパにおける個人の〈部屋〉については、１９世紀の中産階級の成立とともにその一般的普及がゆるやかに進展したのであり、〈部屋〉に個人の心理的価値が託される傾向は、たとえばドストエフスキーの『地下室の手記』において尖鋭的かつ象徴的に表現され、そこに内部世界と外部世界の分離という〈ポスト分離派の時代〉の一般的精神状況すらもが先取りされていることを明らかにした。そのように〈部屋〉に個人的な心理とのかかわりを認める一方で、〈部屋〉と外部との関係の在り方をあらたに見直す時期に至っていることを、とりわけ〈他者〉というキーワードを用いて解明しようとした。さらに、〈部屋〉についての独創的な思想を実際の建築において現実化したアドルフ・ロースの〈部屋〉について文献を渉猟するとともに、その思想をロースの師であり、分離派を代表する建築家でもあるオットー・ヴァーグナーの建築思想と比較しながら、さらに本邦では知られていない文献からの翻訳を少なからず交えて、考察した。(「都市ウィーンとアドルフ・ロース」)。

（３）ローベルト・ムージルの初期作品における〈部屋〉の表象については、論文「ムージルの部屋」(仮題) を現在執筆中である。

５．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計　４　件)

① 赤司英一郎、都市ウィーンとアドルフ・ロース、多文化空間としての都市―多文化教育の教材として、平成２０年度東京学芸大学重点研究費研究報告書、４５～７４頁、２００９、査読無し

② 赤司英一郎、冬ソナとトニオ・クレーゲル、ラテルネ、第１０１号、２１～２３頁、２００９、査読無し

③ 赤司英一郎、崩壊期のハプスブルク帝国の首都ウィーンにおける関係性の変遷について―シュニッツラーの三つの作品に照らして―、世界文学、第１０８号、７～１８頁、２００８、査読有り

④ 赤司英一郎、(書評) 原研二著『物語と不在―十九世紀オーストリア小説とムージル』、ドイツ文学、第１３０号、２３９～２４１頁、２００６、査読有り

〔学会発表〕(計　１　件)

① 赤司英一郎、ウィーンとドイツ文学、世界文学会、シンポジウム都市と文学、２００７．１２．２５．青学会館

〔図書〕（計　３　件）
①　早坂七緒、北島玲子、赤司英一郎、堀田真紀子、渡辺幸子、法政大学出版局、（翻訳）カール・コリーノ著、ムージル伝記１、２００９、３３９～４３０頁、
②　赤司英一郎、李修京、石木隆治、稲見正浩、荻野文隆、加藤登美子、川崎誠司、木村守、久邇良子、斎藤一久、齋藤ひろみ、菅美弥、諏訪部浩一、林邦夫、藤井健志、藤井穂高、松岡榮志、吉野晃、白帝社、多言語多文化社会へのまなざし―新しい共生への視点と教育―、２００８、i～iii 頁、１１３～１３０頁、１４９～１５２頁
③　濱川祥枝、信岡資生、赤司英一郎、新井皓士、飯嶋一泰、石井正人、重藤実、新田春夫、福本義憲、藤井忠、前田良三、光野正幸、クラウン独和辞典　第４版　ＣＤ付き、１８５８頁

６．研究組織
(1)研究代表者
赤司英一郎（AKASHI EIICHIRO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：８０２２２５１１

(2)研究分担者

(3)連携研究者